

「霧の朝の出来事」

吉本椎葉

SE 廊下に響く足音。

佐々木重蔵(84)「あくあ、よく寝たよく寝た。寝るより楽は無かりけりか。よく言つたもんだよ、昔の人は。それより新聞、新聞つと」

SE 玄関ドアを開ける音。

佐々木「おくひどい霧だ。こんな季節に珍しいな霧なんて」

SE 新聞入れを探る音。

佐々木「あれ新聞入ってねえや。また入れ忘れたかあの野郎。この前もこつびどく怒鳴りつけてやったのにまたかよ」

SE ドアを閉め廊下を歩く音。早足。

佐々木「もう6時だつてのにまだ職員、誰も起きてないのか、新聞屋に電話してもらわなくつちやなあ。朝、新聞がなけりや一日が始まらないだろう、まったく」

SE 廊下を歩く音。

田中昇(40)「おはようございます。佐々木さんいつも早いですね」
佐々木「おつ、所長おはよう。それよりまた

新聞が来てないんだよ。俺、朝刊読むのが一番の楽しみだつて知つてんだろう」

田中「それは勿論」

佐々木「俺さあ、このいこま荘つて、グループホームの中じゃ随分と評判良いから入つただけだなあ。そう言えばこの前も消防署から何か言われてたようだし、朝刊来ないなんてまったくこの施設ときたら」
田中「すいません、とにかく電話してみますね」

SE 足音。電話をかける音、ツーツーと音がしている。

田中「あれ? おかしいな電話繋がらない」

SE 廊下を歩く音。軽やか。

清水美紀(23)「おはようございます、所長」

田中「清水さんおはよう。昨日の夜勤はたいした問題もなく楽だったね。今電話が通じないんだ」
清水「電話が?」

SE 電話をかけ直す音、繋がらない。

田中「携帯はどうだろう」

SE 携帯を操作する。

田中「携帯もダメだ」

清水「私の携帯で掛けてみますよ」

SE 携帯を掛けるが繋がらない。

清水「あれ私のも圏外になつてる、昨日までちゃんと繋がつたのに」

SE 足音。

佐々木「どうだい新聞屋の親父なんて言つた」

田中「それが電話繋がらないんです」

佐々木「電話が通じない」

清水「そうなんです、私と所長の携帯も圏外になつていて」

佐々木「どつちの携帯電話も通じないのかい」
田中「ひよつとしたらテレビでニュースやつてるかもしれない、リビングに行つてみましょう」

SE テレビの操作音、ザーというノイズ。

田中「おかしいな、この時間ならもうニュースくらいやつてる筈なのに」

佐々木「なんだい、テレビも故障かい、まったくこの施設ときたら」

清水「このテレビ、もうすぐ地デジになるか

らって先月買い替えたばかりでしょう」
田中「清水さん、そのラジオでラジオか
けてみて」

SE ラジカセの操作音。ピーという雑
音。

清水「変ね、AMもFMも入らない」

佐々木「おいおい、ラジオもかからないのか
い？」

田中N「この時、まだ私は事態の大きさに気
が付いてはいなかった」

タイトルコール「霧の朝の出来事」

SE 廊下を歩く音。

高橋優作(90)「おはよう、みなさん。い
つも早いですが、佐々木さん」

SE 3人(田中、清水、佐々木)の挨拶が重なる。テレビ、ラジオの雑
音と操作音。

佐々木「おお高橋さん、実はね新聞が来ない
んですよ、朝刊が」

高橋「また入れ忘れですか、佐々木さんは新
聞好きだから」

佐々木「それでね、所長に電話してもらった
んだけど。今度は電話通じないんですよ」

高橋「電話が通じない？」

佐々木「そう携帯も」

高橋「携帯も」

佐々木「だからテレビでね、ニュースでもや
ってないかと思ってみたらなんとテレビも

故障だって、まったくこの施設ときたら」

田中「だめだ、全然入りません」

高橋「故障ならしやうがないじゃろう」

田中「いや昨日までは何ともなかったんです
けどね」

清水「所長、ラジオも入りません」

佐々木「ラジオもテレビも故障なんだよ」

SE 足音、鼻歌まじり。

久保「皆様、お揃いで、おはようございます。

何していらっしゃるの朝の早くから、あら、

なんだか今日は暗いわね」

SE カーテンを開ける音

久保「まあ、凄い霧」

清水「本当だ、こんな霧、釧路でもあまり見
たことないです」

久保「ま〜美紀ちゃんって釧路出身？」

清水「子供のころは霧が出ると霧笛が鳴って

今日は霧だつてちよつとわくわくした

り・・・FO」

高橋M「霧か、こんなひどい霧はまるであの
朝のようじゃ」

SE 小さく戦鬨の音、機関銃や飛行機、
戦車の轟音、突撃の声。

高橋M「ガダルカナル島・・・」

SE 霧笛の音

清水「霧笛がポーってね、懐かしいな。でも

去年くらいに霧笛も廃止になっちゃって、

もう聞けないですよね」

久保「霧笛かあ、ロマンチックね」

佐々木「そんな事より、所長どうするんだ、

新聞読めない、それにテレビもラジオも故
障ってどうするんだ」

田中「どうしましょう」

佐々木「おいおい、あんたがどうしましょう
って」

久保「私お腹が空いちやった」

田中「清水さん、朝食の用意は？」

清水「あつ、大変」

SE ばたばたと走る音。

田中N「入居者が15名、職員が5名の小さ
なグループホームいこま荘だが、朝早い老

人が多いので朝食時間は意外に忙しい」

田中「すいません、すぐ支度しますから、少
し待っていて下さい」

SE 食堂のドアを開ける音。音楽。

田中「清水さん、どうしたの？」

清水「（泣き声）所長。誰も居ないんです、朝食当番の山本さんも菊池さんも、それに・・・」

田中「誰も居ないって、そんな馬鹿な」

清水「それに所長、他の部屋見ました？」

田中「いや」

清水「誰も居ないんです」

田中「誰も居ないって」

清水「さつきリビングにいた5人だけしか」

田中N「俺はこの施設全部を必死に探し回った。清水さんの言うとおり、俺たち5人以上は誰もいなかった。ようやくとんでもない事態だつてことが分かってきた」

SE 音楽。

久保「所長さん朝食は・・・、どうかなさいました、お顔が真っ青」

田中「あの・・・」

佐々木「俺も腹へつたよ、用意出来たのかい」

田中「誰も居ない」

佐々木「え？ 何聞こえないよ、そんな小さな声じゃ」

久保「美紀ちゃん、泣いてるの？」

清水「久保さん・・・」

佐々木「どうした所長に怒られたか？」

清水「ちがうんです。居ないんです」

佐々木「誰が」
清水・田中「みんな」

SE 音楽。

佐々木「み、みんなって」

久保「どういう事なの」

高橋「誰がいないのじゃ」

田中「この施設、この家には私たちしかいないんです」

佐々木「何馬鹿なこと言ってるんだい、俺たちじゃないって。そんなこと」

田中「本当なんです、部屋全部見てきました私達5人しかいないんです」

久保「じゃあ、他の人たちはどこへ行ったの」

田中「わかりません」

久保「私達だけおいて出ていったの」

佐々木「そんなことがある筈がないよ、どっかに隠れているんじゃないか。俺達を驚かせようとしてたりして」

田中「この家全部調べたんです」

佐々木「じゃあどうするんだよ、新聞は来ないテレビもラジオも壊れてる、それに俺たち以外ここには誰も居ないって、一体どういうことなんだよ」

田中「わかりません・・・私ちよつと外を見てください」

高橋「何処へ行くのじゃ」

田中「とりあえず角の交番まで行ってみます。交番なら何か分かるかもしれないし」

清水「所長、気を付けてください、外ひどい霧です」

田中「大丈夫、それより清水さん、皆さんに朝食を出してあげてください」

SE 玄関のドアを開ける音。

久保「きゃー凄いい霧。これじゃ何にも見えないわ」

田中「じゃあ行ってきます」

高橋「気を付けて、無理をするな」

田中「はい」

SE 音楽。朝食を取っている4人。

久保「清水さんお醤油とっていただけける？」

嫌だわこんな霧、今日コンサートがあるのだから楽しみにしていたのに」

佐々木「どうも朝刊を読まないと一日が始まった気がせん。清水さん、お茶頂戴」

高橋「しかし不思議なことがあるものじゃな」

佐々木「所長遅いなあ。角の交番なら十分もあれば帰ってくるよな」

高橋「まだそんなに経っておらんよ」

久保「交番で色々聞いてるんじゃない」

清水「久保さんお替りは？」

久保「じゃあ、ちよつとだけ頂くわ」
佐々木「俺もくれ、腹が減っては戦が出来ないと言っからな」

清水「高橋さんは」

高橋「わしはもういい」
佐々木「でもみんな何処へ行ったんだい、俺達おいて、水臭いな」

高橋「昨日の夜に出て行ったのかの」
佐々木「寝るときは皆居たのが朝になって居ないのだったら、それしかないだろう」

高橋「なんで出ていったのじゃろう」

佐々木「さっぱりわからん」
久保「でもおかしいわ、松本さんや棚田さん私をおいて行くわけじゃないもの」

清水「仲良かったですものね」

久保「絶対におかしい」
佐々木「神隠しかな」

清水「何ですか、神隠しって」
佐々木「急に人が訳も無くないなくなってしまう事さ」

久保「それより霧、全然晴れないわね」
清水「所長大丈夫かしら」

SE 音楽、田中の荒い息遣い。

田中M「くそ、なんにも見えやしない、この霧ちよつと変だよな。もう随分歩いたつもりなのに一体どうなってるんだ？」

SE 足音。

田中M「霧晴れないなあ。そう言えば昨日の朝飯のとき・・・」

SE 朝の食卓、テレビもニュース、トースターの音。

田中留美子(35)「あなたトーストもう一枚いかが？ そうだ明日は夜勤でしょう？」
田中「そうだよ、今月はあと2回」

留美子「明日友達が温泉に行こうって、泊りがけで」

田中「先週も同窓会で」
留美子「明日は違う友達」

田中「レナどうするんだ」
留美子「大丈夫よ、おばあちゃんの家で」

田中「またかよ」

SE 荒い息、足音。小さな泣き声。

田中「あいつこの頃化粧が濃くなって同窓会だの、友達と温泉だのって、実家が近いのをいい事に娘を預けて遊びまわってるけど。なんでかな？ 俺といると退屈なのかな？ あれ音が聞こえる。あっちへ行ってみるか」

SE 小さな泣き声。足音が遠ざかっていく。音楽。

佐々木「もう我慢できん」

清水「佐々木さん落ち着いて」
佐々木「所長出て行ったきり帰ってこないじゃないか、どうするんだ俺たち、どうするつもりだ」

清水「わたし・・・」
久保「佐々木さん、美紀ちゃんにそんなこと言ったってしょうがないわよ。美紀ちゃんだって訳分らないんだから、そうでしょう」

佐々木「じゃあ、どうするんだ黙って帰ってこない所長をずっと待ってるのか」

久保「あなた、どうしたいのよ」

佐々木「どうって・・・」
高橋「大きな声出したってどうにもならん。今は落ち着け」

佐々木「こんな訳の分からないことになって落ち着いてられるか」

高橋「ここには4人しかおらん、いがみ合っでどうする」

佐々木「で、でも・・・」

久保「そうだ。何かお話でもしましょう、少しは気が紛れるかもしれないわ」

佐々木「何の話をするんだ」
久保「じゃあ私の話をします、お婆ちゃんの話なんか聞きたくない？」

清水「聞きたいです」
久保「私ね、ピアノストになりたかったの」

清水「ピアノスト？ 素敵」
久保「こう見えても昔、私の家はちよつとだけお金持ちだったの」

SE ピアノの響き。

久保「自分で言うのも何だけど、私才能があ

ると思ったの。5歳で始めたピアノだったけど、最初から大好きだったわ、お稽古が辛いなんて一度も思わなかった。そうピアノが私の総てだった」

SE ピアノ曲。空襲警報。

久保「戦争さえなければ」

清水「戦争？」

久保「戦争が終わって、これで何とか音楽だけでピアノだけでやっていける、そう思ってたわ。でも私の家は貧乏になったの。広くて素晴らしい牧場や農地が没収され私も働かなければ食べていけないそんな時代になった。でもピアノは捨てられなかった、何とか頑張って音楽教師になったわ。でもピアノには成れなかった」

清水「どうして」

久保「私くらい弾ける人は沢山いたのよ、その中からピアノストになるなんて、毎日練習してコンクールに出て、でもそんな時間もお金も私には無かった」

SE ピアノ曲

久保「ごめんなさいね、詰まらない昔話しちゃって。でも今でも夢を見るの、キララのような大きなホールで満員の観客に向かって力一杯ピアノを弾いて、大歓声で・・・笑っちゃうわね」

清水「そんなことないです。素敵ですそんな夢見られるんですもの久保さんは」

久保「美紀ちゃんはどうな夢あるの」

清水「夢？ 私なんてほんと平凡な人生、中学、高校は釧路、何とか一人暮らしがしたくて、両親に無理言って札幌の短大に行かせてもらって。一人暮らしは楽しかった。釧路と比べると札幌は夢のような街だった友達も出来て飲みに行ったり旅行したり」

SE クラブの騒音、若者の嬌声。

清水「でも就職して毎日同じような仕事をして、それに私の短大なんて派遣くらいしか仕事がなくて。同じ仕事していても給料や待遇が全然違うし・・・それで私、介護の仕事しようと思って」

久保「ここに来たの」

清水「はい。まだここもパートですけど、なんとか資格とって。でも現実はどうぞん私を追い越して行ってしまふ。私ほんとは何がしたいのかわからない」

佐々木「派遣って辛かったのかい」

清水「はい」

佐々木「俺のスーパーはバイトのおばちゃんばかりだったからそんな辛い事はなかったけどな」

久保「佐々木さんスーパーやってらっしゃいたの」

佐々木「ああ。佐々木スーパー聞いた事ない

かい？俺新十津川の百姓の三男坊さ、百姓と言ったってピンきりでさ、十人も兄弟がいれば俺なんかに分けてもらえる田んぼなんてありやしない。中学卒業してすぐに札幌に出てきたよ、最初は金物屋での丁稚」

清水「丁稚？」

佐々木「今で言う住み込みのただ働きみたいなもんさ、給料なんて雀の涙、飯食わしてらんだから文句言うなってね。でもあの当時飯が食えるだけでした。死ぬ気で働いて三十で独立、なんとかスーパー作ったのさ、儲かったよ最初のうちは。外車なんか買っちゃってススキノで一晩に十万も二十万も使ったさ。良かったなあ、あの頃は面白かった」

久保「そんな面白い事があって良かったじゃない。人生満更でもなかったわけね」

佐々木「さあどうかなそれは。あつという間に東京の大手が伸びてきて。二東三文で売っぱらったさ、スーパー。女房にも悪い事した。忙しいばかりで少し楽になったと思ったら癌だつて。あいつには何にもしてやれなかった。それだけが俺の・・・」

SE 音楽。

高橋「わしの話を聞かかね？」

久保「珍しいわね、高橋さんが話すなんて」

高橋「そうじゃな、もう人には話さんつもりじゃった。墓場まで持って行くつもりの話

じゃ、だが今日この霧を見たら思い出してしまった。あの日のことを」

SE 先ほどと同じ戦争の背景音。

高橋「昭和十七年十月十日わしは初めてガダルカナル島に上陸した。一ヶ月前までそんな島があることさえ知らなかった。わしらは第二師団はずっと支那で戦っておった。相手は農民上がりの兵隊ばかり、ろくに戦闘も無くあの広い支那の大地をどこまでも敵を追って進軍していた。わしらは強い軍隊だ無敵だと自惚れていたかもしれんな。あの島に上陸するまでは・・・」

清水「ガ、ガダル・・・」

高橋「ガダルカナル島じゃ、知らんのか」

清水「初めて聞きました」

高橋「学校では教えんのか戦争の話を」

清水「はい、ほとんど」

佐々木「俺知ってるぞ、その島、確か戦闘で死んだよりの餓死した方が多かつたというあの島だよな」

高橋「そう、わしらは飢餓の餓を取って餓島と呼んでいた。飢える島だった。」

あんなちつぽけな島で二万一千人の兵隊が死んだんじや。佐々木さんが言うとおりの七割は餓死じゃ。弾もない食い物もない、あの島は地獄だった。

総攻撃の朝深い霧が島を覆ったちようどこんな霧だ」

久保「苦勞をなされたのね」

高橋「いや生きていたほうが苦勞だったかもしれん、あの時死んでいたらこんな話もすることはなかったし、昔の事を思い出して眠れぬ夜を過ごすこともなかったのだから」

佐々木「どうやって助かったんだい」

高橋「わしは先頭を駆け抜けた。近くに砲弾が着弾したところまでは覚えているが、気が付いた時はアメリカ軍の病院の中だった。わしは捕虜になった、恐れていた事が起こった。知っておるか佐々木さん」

佐々木「なんだい」

高橋「生きて俘虜の辱めを受けず。これは幼年学校から教えられてきたことじゃ」

佐々木「捕虜にはなるなと」

高橋「そうじゃ」

佐々木「でもしようがないじゃないか」

高橋「わしは今でもあの時の仲間に謝りたいと思ってるんじや、わしだけ生き残ったことを」

佐々木「そんなこと言ったって」

高橋「そう始まらない、だがあんな無謀な突撃など指示しなければわしの部隊は何人かは助かっていたのかもしれない」

佐々木「でもそれは上からの命令だろう？」

高橋「確かに。じゃが現場での判断は許されておった。ずっと碌なもの食えず、鉄砲の弾でさえ一人何発も無かった。あんな状況で突撃など・・・わしは死にたかつたのかもしれない死んだほうがよほど楽だと何

回も思った。だが生きて帰れたかつた部下達を殺してわしだけが生き残ってしまった」

久保「高橋さん・・・」

高橋「つまん話を聞かせてしまったのう」

久保「なぜかしら、急に昔の話なんてしちゃっておかしいわね。私たち」

高橋「まるでわしらもうすぐ・・・」

佐々木「もうすぐなんだい？」

SE つけっぱなしのテレビから雑音と途切れ途切れにニュースが聞こえる。

清水「テレビが写るわ」

佐々木「ニュースか？」

久保「雑音が酷いわね」

SE TVのニュース速報、途切れ途切れに火事のニュース。
「札幌の老人ホームいこま荘から出火、四名の死亡が確認」

久保「いこま荘」

佐々木「ここと同じ名前だ」

高橋「同じ名前？」

SE ニュース「なお死亡が確認されたのは入居者の高橋優作さん九十歳、佐々木重蔵さん八十四歳、久保陽子さん七十九歳、パートの清水美

紀さん二十三歳。
所長の田中昇さん四十歳は意識不
明の重体です・・・」

高橋「わしらの名前じゃ」

佐々木「いこま荘って」

久保「じゃあここは」

清水「ひよつとして私たちが・・・」

SE 音楽。消防自動車、救急車の音。
焼け落ちる建物。

田中N「俺が気が付いたのは病院の集中治療
室だった。あの霧の中で聞いた泣き声で目
が醒めたんだ」

レナ「(小さな泣き声) パパ」

留美子「あなた！聞こえる？ ホームが火事
で・・・」

田中「火事？ みんな大丈夫だったのか？ 被
害は・・・」

田中N「被害者の名前を聞いた時、俺は心の
底から震えた。あの朝の4人じゃないか。
あれは決して夢なんかじゃない・・・
あの霧の朝のことは一体・・・」

SE 音楽。

(了)